



前編

01・夏休み、さびれた田舎、川原で出会う

とある年の夏。七月二十七日（月）、十八時ごろ。

日本のとある、かなり寒い地域の田舎町。

天気は晴れ。気温は二十四度程度。

涼しく、心地よい夏の夕方。

場所は、主人公の伯父と伯母が経営する民宿……の、近くにある川原。

主人公は今、両親のもとを離れ、伯父と伯母のところに一人預けられているのだ。

そんな主人公は、今、川原にぼつんとたたずんでいる。

買い物帰りだが、まだ帰りたくはない。

伯父と伯母は文句のつけようのない善人だが、会うのは数年ぶりだ。

しかも、両親なしで一緒に過ごすのは初めてである。

そんな二人のところへ戻るのは、何となく落ち着かないのだ。

……もう少しだけここにいたい。

だから主人公は、さっきから川原で見つけた『あるもの』を凝視している。
地面にしゃがみ込んで、もっと近づくわけでも、直接触れてみるわけでもなく……。
ただ、泥がついて汚れたそれを、じっと眺めている。

それは、何というものではない。

たいていの人は無視するか、そもそも、その存在にも気づかないかもしれないものだ。
たとえば主人公だって『あるもの』に写っているのが、もう少し違う何かだったら……。
そそくさと通り過ぎていた事だろう。

だけど、それはどうしようもなく主人公の目を惹いた。
たまらなく気になって、もう少しだけ見ていたかった。

『こんなところを誰かに見つかったら』

そう思いながらも、なぜか離れられずにいるほど、それは、主人公にとって気になるものだったのだ。

SE1 川原の環境音

【最初から最後まで流す】

【トラック開始からトラック終了まで、小さめの音で流し続ける】

【0―15秒ほど流してからSE2】

【その後、音量が小さくなる】

SE2 弥映の足音

【最初から最後まで流す】

【遠くから、だんだん近づく】

そこへ、足音が近づいてくる。

人間の足音だが、それにしてはどこか妙な響きだ。

だが『あるもの』に気を取られていた主人公は、気づくのが遅れる。

川原は緑が豊かで、木々や草花の揺れる音がするのがいけない。

主人公がようやく振り向いた頃には『彼女』はもう、すぐ背後にいた。

●中央 少し遠い

「優しく。からかうように、たしなめるように。」

主人公が川原で何を見ていたのかは、まだ気づいていない」

こら。こんな所で危ないよー？ そろそろおうちに帰んなさい？」

〈主人公〉

「……………」

主人公、しゃがみこんだまま顔を上げ、声をかけてきた人物を、ぽかんと見上げる。そこにいたのは、二十代半ばほどと思われる、美しい女性だった。

『彼女』は主人公を見て微笑むと、風になびいた髪の毛を、顔にかからないようにそつとよける。

それから、もう一度、ふふ。と小さく笑った。

その姿は、余裕があつて。

でも、なんだか可愛らしくて、いたずらっぽい少女のような雰囲気もまといっている。

確実に『大人の女性』ではあるのだが、ただそれだけではないような——……不思議な印象の人物だった。

だが、そんな人が、なぜこんな田舎の川原にいるのだろうか。

主人公、まさかこんなところに若い女性が現れるとは思わず、言葉を失う。

……いや、彼女と比べた場合、主人公の方が確実に『若い女性』ではあるのだが……。

SE3 弥映の足音2

【最初から最後まで流す】

【もう少し近づく】

弥映、少し近づき、声の距離感も近づく。

●中央

「親しみを持って話しかける」
何見てんの？ 虫？

【覗き込んで、それがどうやら雑誌らしいと気づく。
その時点で何を見ていたのかおおむね察するが、
もうどうしようもない】
あ、雑誌？」

〈主人公〉

「……あ……」

主人公、慌てて『あるもの』を隠そうするが、時、すでに遅い。
『彼女』の目がそれを確認してしまった。

SE4 アダルト雑誌が風に捲れる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……………」

主人公、ばつが悪くなって目をそらす、もはや言い訳のしようもない。
主人公が見ていた『あるもの』。
それは、捨てられたアダルト雑誌だったからである。

●中央

「すべてを察した。」

だが、いたって普通のトーンで。あまり聞き手を不安にさせないようにする。
ここで主人公が見ていたのがアダルト雑誌であると理解する」

……………あぁ」

その時、開かれたページで裸になって寝転ぶ女性と、目の前の『彼女』の目が合う。
『彼女』は裸の女性を、目を細めて見下ろすと……………それから、主人公の方を見た。
それが、たいして気にしていないような表情だったので、主人公は、なんだかホッとす

る。

●中央

「少し間をあけてから。優しくからかうように」
そういうの好きなんだ。

「少し間をあけてから。優しくたしなめる」
でも、ほどほどにしときなね。

落ちてるものとはいえ。

女の子が川原でエロ本（ほん）なんか見てたら、変な人が声かけてくるかもしれないよ」

〈主人公〉

「っ……」

主人公、すべてを見抜かれ、恥ずかしさで顔が真っ赤になる。

走って逃げ出したい衝動にかられるが、それをしたところで、雑誌に夢中になった事実
は消えない。

だが、何も言い返せないままではいけない。

主人公はこれでも、学校では秀才で通っている。

本だってたくさん読んでいるし……要するに、同世代の女子よりも口が回るのだ。

〈主人公〉

「……もう、かけられてます」

だが、主人公がやっとの思いで打ち出したカウンターは、彼女の笑顔に吸い込まれた。

● 中央

「きょんと、主人公の言葉を復唱する。声が笑っている。」

主人公が反論してきたのが面白いし、確かにその通りだと思う」

『もうかけられてる？』

【穏やかに笑う。面白くてしょうがないが、大きな笑い声にはならない】

あはは。

【少し間をあけてから。少し楽しそうに。

実際は自分を『変な人』だと思っているが、しれっと否定する】

あたしは変な人じゃないよ」

〈主人公〉

「ええ？」

主人公、怪訝な目つきで、改めて彼女を見上げる。

なんだか面白くないが、やっぱりとても美人だ。

目が大きくて、鼻筋の通った派手な顔立ちで、ちよつと頬骨が出ていて――……この前見た映画のヒロインと、顔の系統が似ているような気がする。

つまりその位、レベルの高い顔という事だ。

それから、黒髪がとてもきれいだ。

光に当たったところだけが、きらきらと違う色になって艶めいている。

肌は透き通るように白くて、身体は折れそうなほど細くて。

だけど、触れたらとても柔らかそうで。

蓮っ葉な話し方をするくせに、なぜか下品な感じはしなくて……。

なんだか矛盾しているのだ。

そう。やっぱり……『変な人』だと思う。

● 中央

「あたしは聞きたい事があって話しかけたの。

【少し間をあけてから】

ねえ。この辺に泊まれるとこってある？
急に来たからわかんないんだ」

〈主人公〉

「……旅行ですか？」

ここで、話が急に身近なところにジャンプした。
今の主人公にとって『泊まる』という言葉より身近なものも、そうそうない。
毎日民宿で宿泊客を見ているからである。

●中央

「しれっと、嘘をついていない範囲でごまかす。

本当は『そんな感じ』と言えるものではないが、話を合わせる」
うん。そんな感じ。旅行。

昼に適当な電車乗って。適当にここまで。みたいな」

〈主人公〉

「はあ」

主人公、彼女の話に相槌を打ちつつも、なんだか妙だと思う。だって彼女は、明らかに軽装だ。

肩に、少し大きめ程度の鞆を一つかけているだけなのである。

主人公が伯父伯母の民宿に来てからは、まだ間もない。

だが、主人公が思うに……旅行者というのは、もっと全体的に重たいもののような気がする。自分だって、ここに来る時はそうだったし。

第一、親戚が民宿を経営している身で言うのもなんだが……ここは、何となく遊びに来て、何となく楽しめるような土地では、ない。

しかし、返事をしないわけにもいかない。

〈主人公〉

「……それで、泊まるところを探してるんですか？」

●中央

「『ビジホ』は『ビジネスホテル』の略」

うん。ビジホでも旅館でも何（なん）でもいいんだけど。

今んとこ、それらしいの見かけなくてさ」

主人公、民宿の事を話すべきか一瞬迷い、川原には沈黙が訪れる。
だが……教える事にする。

〈主人公〉

「うち……ですね」

● 中央

「思わずオウム返しする」

うち？

【主人公の言っている事が、今一つよくわからないので確認する。

ここでは『あなた』呼びをする】

あなたんちに泊まれるの？」

主人公、深く頷きつつ、なんだか恥ずかしくなる。

主人公としては、宿泊先を探している人に事実を伝えただけだ。

それから、いつでも宿泊客募集中の伯父伯母の手伝いをしたいだけだ。

……だが、これでは、彼女ともっと一緒にいたくて、自宅に誘っているようである。

自意識過剰かもしれないが。

〈主人公〉

「……正確には、私の、伯父さんと伯母さんの、うち。です。

もうちょっと行ったところで、民宿をやってるんです。

この辺は、たぶん……うちしか泊まれるところ、ないと思います。

他のところを探すなら、駅まで戻る事になると思う」

主人公が話す姿を、彼女はきょとんとした目で見つめている。

たずねた彼女自身も、まさかこんな展開になるとは思っていなかったのだろう。

なので、主人公はひたすらに居心地が悪い。

主人公は、自分なりに善意の限りを尽くした。

他人には無差別に親切にする。それが、主人公のポリシーだからだ。

……だが、たった今アダルト雑誌を読んでいる場面を目撃された女性に、居候先を紹介するのはどうなのか。お互い気まずくはなかるうか。

それに、彼女にだって選ぶ権利はある。

断るなら断ってほしいと思う。

だけど……。

●中央

「事態を理解し、確証を得るために復唱する」

あ、伯父（おじ）さんと伯母（おば）さんが民宿やってるんだ。

【意外なほど素直に感謝する。主人公に好感を抱き、少し声のテンションが上がる】
教えてくれてありがとう。

じゃあ、そこ連れてってくれる？」

〈主人公〉

「……えっ？ あ？ ……いい、ですけど」

主人公、意外過ぎて、上手く返事ができない。

主人公は、知らない人と話す事は別に苦手ではない。

でも、なぜか、今はそれがうまくできない。

それは、この、いかにも無礼そうで、こちらを年下扱いしてきそうな女性が、意外なほど素直にお礼の言葉を口にしたからだろうか。

つまり、主人公がそれに驚いてうまく話せなくなっているなら……。

無礼なのは、主人公の方。……のような気がする。

●中央

「ホッとしたように息をつく」
はー。

【嬉しそうに】
助かったあ。

【ホッとして、話し方がちょっと幼くなる。

『すごいきちんとした感じの子』とは、主人公の事をさして言っている」
なんかね？ 川んここに、すごいきちんとした感じの子がいるから。

『この子なら、この辺の事知ってるんじゃないか』って思ったんだよね。

【嬉しそうに。素直でかわい、少女のような雰囲気で。

語尾に『！』がつきそうでつかない程度の、絶妙な声のトーンで」
勘だったけど大当たりだった。

【少し間をあけてから。ここで大人ぶってからかう口調に戻る。
にやにやと楽しげに。優しくからかうように」

まさか、そんなもの見てるとは思わなかったけど」※

〈主人公〉

「なっ……！」

主人公、蒸し返されて真っ赤になり、ますます恥ずかしくなる。

やっぱりこの人は無礼だ。

いや、事実を言っているだけだから無礼ではないのか。

確かに川原で堂々とこんなものを見ている自分も悪い。わいせつ物閲覧罪かもしれない。だけど、せっかく助け舟を出してあげたのに、蒸し返すのはどうなのか！

なんて嫌なやつだ。ちよつと美人だからって、ずいぶん不敵にふるまってくれるものだ。まったくまったく。なんなのなんなの……！

と、主人公は頭の中だけでカツカと怒り続けるが、むろん、彼女はそんな主人公をよそに、くすくすと楽しそうに笑っている。

● 中央

「にやにやと、優しくからかう。」

ただし、アダルトなものに関心がある事を、おかしいとは全く思っていない」
そうだよねえ。気になるよねえ。

あたしもあんた位の年の頃が、一番そういうのに興味あつたもん」

〈主人公〉

「あつ、あつ。あの。この事はっ……」

主人公『どうか伯父さんと伯母さんには言わないで』と懇願しようとするが、相変わらず上手くしゃべれない。

主人公は、伯父と伯母の前では優等生で通っている。
少しでも心配をかけるような事はしたくないのだ。

● 中央

「『当然だ』という感じで。伯父伯母に告げ口する気は一切ない」
ああ」

だが、彼女は当然のように頷く。

さつきまでねちねちとからかってきたくせに、守るのが当然の秘密のように言う。

●中央

「楽しいに笑って。必死になっている主人公が可愛い」
誰にも言わないよ。

『言うつもりはない』という事を強調するように、さらりと話題を変える」
ほんと助かったし。ありがとね。
じゃあ、行こっか」

〈主人公〉

「……あつ、あつ………はい」

だから、主人公は戸惑う。

てつきり、もっと追及されたり、『伯父さんと伯母さんにチクっちやおうかな』なんて
言われて、いじめられたりするのかと思ったのに……。

実際はそうはならなかった。

つまり彼女にとっては、それ位、性はたわいなくて、日常的に触れるものなのだろうか。
大人とは、そういうものなのだろうか……。

なんだか悔しいけど、そうなのかもしれない……。

主人公、急に彼女が年上らしく見えてくる。

SE5 主人公が立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……あれ？」

● 中央

「不思議そうに。主人公が何を言いたいのかわからない」
ん？」

こうして主人公は、民宿へ彼女を案内しようと立ち上がったが、ここで、ある事に気づく。

彼女の足元が、妙な事になっているのだ。

〈主人公〉

「……足、どうしたの？」

●中央

「何の事だかわからない」
足？

「ここで、靴のヒールが折れていることを指摘されているのだと理解する」
ああ、靴？

「さほど困っていないかのように、平然と話す」
靴のヒールがね、来る途中で、片っぽ折れちゃったの。

「※マークまで、ほんの少しだけ早口になる。」

『平気だ』とアピールするかのように」

で。だったら両方折った方がマシかなと思ってそうしたら、余計歩きづらくなっちゃって。

でもまあ歩けない事もないし」※

主人公、それを聞いて、息をのみ込む。
今日二度目の沈黙だ。

まったく、何と手のかかる人なのか……。いや、別にかかつてはいないのだけれど。単に私が気になって、放っておけないだけなのだけれど。

主人公、できれば『とある件』については、このまま黙っていたい。

喜ばれるかわからない事に対して勇気を出すなんて億劫だし、できれば、できるだけ努力しない人生を歩みたいからだ。

……でも、主人公にはそれができない。

自他ともに認める、世話焼き系女子だからだ。

〈主人公〉

「……います？ 靴」

● 中央

「【驚いて。主人公が何を言いたいのかわからない】へ？」

〈主人公〉

「足、何センチですか？」

●中央

「ぽかんとして。何が起きているかわからないが、とりあえず質問に答える」

……二十四センチ」

SE6 主人公が靴から靴の入った袋を取り出す音

【最初から最後まで流す】

主人公、さっき買ったばかりの靴が入った袋を差し出しながら、今日買った靴のサイズを思い出す。

漠然とMサイズを買ったはずだから大丈夫だ。

彼女の足が、極端なサイズではなくて良かった。

一方、彼女は驚いている。それはそうだろう。

偶然話しかけた子が、偶然靴を持っている。そんな展開、想像できる方がすごい。

● 中央

「【驚いて。まさか、主人公が替えの靴を持っているとは全く思っていなかった】
持ってたの？」

〈主人公〉

「……はい……。あります。替えの靴。だから、これ、使ってください」

● 中央

「【驚いて。まさかそこまでしてくれるとは思わなかった】

いいの？

というか、何でもう一足（いっそく）持って歩いてんの？」

もったもた指摘だ。でも、靴は実際にここに存在するのだ。

活用するべきだろう。

今の彼女の足元はあまりにもアンバランスで、痛々しくて……見えていて心配になる。

〈主人公〉

「民宿で使おうと思って……。ちやうどさつき、買ったんです。

だから未使用なんで、安心して履いて下さい」

●中央

「〔納得して〕

あ。宿の上履き（うわばき）用に買ったんだ。なるほどね。

【気持ちは嬉しいが、なんだか申し訳ない】

でも、自分で使うために買ったんでしょ？」

〈主人公〉

「……いいから使って下さい。その靴じゃ、怪我しますよ」

主人公、ぼそつとつぶやくように言うと、靴の入った袋を彼女に押し付ける。

確かにこの靴は自分用に買ったものだが、この人にあげる事にする。

もう、そう決めたのだ。

SE7 主人公が鞆から靴の入った袋を弥映に押し付ける音

【最初から最後まで流す】

● 中央

「すごく嬉しい。思わず、素で戸惑った声が出る」
あ……。

「嬉しくて、少しうろたえる」
そっ、か。

「少し間をあけてから」
ありがと。

「気づかれないよう、無理やり元の声のトーンに戻す」
じゃあ、いただく！

「すごく優しい声で」
あんたって優しいね。

「元の感じに戻ってからかう」
もしかして神様？」

主人公、嬉しいような、なんだかムツとするような、妙な気持ちになる。
『そんなものではございません』と、思わずむきになって、言う。

〈主人公〉

「神様じゃありません。人間。『那須川 結夏（なすかわ ゆうか）』って人間です」

● 中央

「【なぜかむきになる主人公が可愛い】

あはは。そりやそうだ。あたしも人間」

〈主人公〉

「お姉さんこそ。何してる人ですか」

主人公が問いかけると、彼女が笑った。

さっきから思っていた事だが、彼女は笑うと、急に幼い印象になる。

まるで少女のように、くしゃっと破顔して……悔しいが、それが可愛い。

● 中央

「【ここで、名乗っていなかった事を思い出す】

あ、そうだ。自己紹介してなかったね。

あたしの名前は……」

ここでフェードアウトして終了。